

明治雑誌記事と魯迅の「スパルタの魂」

森 岡 優 紀

はじめに	363
I 執筆時期について	367
II 「スパルタの魂」と明治期のギリシア史	369
III 明治期の少年雑誌記事と「スパルタの魂」	374
IV 「スパルタの魂」におけるセレーネの形象	379
V 史実の書き換えと時代の影響	383
VI 「スパルタの魂」の構成と文体	384
おわりに	388

はじめに

北清事変発生後、ロシアは義和団による東清鉄道支線や通信などの破壊を口実にして中国に大量の派兵を行い、事変終了後も長期駐兵をして撤兵しようとしなかった。ロシアはこの派兵を足がかりにして中国の東北部の不凍港を確保し、満州支配を目論む計算であったが、それは中国にとって満州割譲へと繋がる可能性もあり、中国留学生はロシアの満州占領が列強による中国の瓜分を促す契機となるという強い危機感を抱いていた。

一九〇三年四月、ロシアが新たな七項目要求を中国側に強要してくると、在日中国人留学生はロシアの要求拒否を清朝政府に申し入れするだけでなく、自ら学生義勇隊を組織して袁世凱率いる北洋軍に投じる決議をする。留学生達が北洋大臣にあてた書簡は『浙江潮』第四期「留学界紀事・拒俄事件」の欄に掲載され、そこには古代ギリシアとペルシアの戦争、テルモピュライの役が例えに引用されていた。

昔、ペルシア王のクセルクセスは十万の大軍を率いて、ギリシアを併呑せんとした。しかしレオニダスは自ら数百の壮丁を従えて、険隘の地で防戦し、敵陣に突入して死闘の果て、全軍玉砕した。今にいたるまでテルモピュライの役は、栄名を列国にとどろかせている。泰西では三尺の童子といえども、これを知らぬはない。そもそも区々たる半島のギリシアにおいてすら、国を辱めざる義士がいたではないか。わが数百万里の帝国にして、義士なかるべけんやである。（『浙江潮』第四期）

魯迅はこの書簡が掲載された次号の『浙江潮』第五期に同じくテルモピュライの役を題材にした「スパルタの魂」を掲載した。この作品は義勇隊事件に触発されて「尚武精神」を称揚する作品であるが、芸術的な価値が高くないせいもあって初期の習作的作品としてみなされてきた。作品に表れている魯迅の愛国精神を称える論文などが存在するものの、膨大な魯迅研究のなかで言及される事が少なく、あまり重要視されてこなかった作品である⁽¹⁾。

だが、幾つかの問題についてこの作品をより深く考察する必要性を感じる。まず第一にこの作品が創作ではなく、翻訳と考える論考が存在することについてである。この作品を翻訳とみなす樽本氏は日本語の藍本が存在する可能性について次のように述べている。「魯迅『斯巴達之魂』が創作であるか、翻訳なのか、はっきりしない。小説、翻案小説、翻訳に近い、などと書かれているだけで専論が見当たらない。日本で議論が少ない理由を推測することは、容易だ。翻訳である、というためには『斯巴達之魂』が拠った原作を提示しなければならない。しかし、その原作は、現在にいたるまで探し当てられていない。探索の努力は続けられているようだが、成功していないことになる⁽²⁾。」そして、樽本氏も探索の努力をしたが、いまだに藍本の存在を発見するまでには到っていない。

確かにこの時代において、翻訳と創作の境界が曖昧な作品は稀ではなく、周作人の「孤児記」のように他の作品の一部を自らの作品に組み込むことは多々ある。「スパルタの魂」も単純に創作としてみなしにくい要素を持っており、後述するように当時日本の多くの文献を寄せ集めた編訳という一面も有している。もしこの作品が意識であるとするならば、魯迅はどのような形で意識をしているのかを詳述しなければならないし、また創作であるとするならば、これら参照とした文献と魯迅のテキストとがどのように関係しているのかについて論じなければならない。これらの問題は、魯迅が参照とした藍本との比較を抜きにしては考察できないであろう。

もう一つの問題はこの作品のテーマについてである。前述のように「スパルタの魂」は古代ギリシアのある一つの戦闘をモチーフとしているが、魯迅はこの作品を作成する材料を得るために日本という媒体を通じたため、この作品には当時の日本の思想状況が反映さ

れている。例えば、それは「スパルタの魂」で用いられている言葉にも如実に現れている。「スパルタの魂」のなかには「スパルタの武士」、「スパルタ武士の魂」、「スパルタの武徳」等の言葉が多く使用されている。スパルタの親衛隊の戦士、アリストダモスがテルモピュライの役において自己の振る舞いを恥じてプラタイアの戦いで汚名をそそいで戦死した時に、将軍がその振る舞いを称えて次のように述べる場面がある。

そのように申すなら、スパルタ軍人の公言に従い、彼の墓は建てさせぬことにする。しかし、わが輩は思う、墓がなき者の戦いて斃れしはますますわが輩を感動させ、わが輩を喜ばせた。わが輩はスパルタの武徳が卓越していることを、いっそう明らかに認識したぞ。(略) ああ、諸子よ、彼に墓はつくられずとも、彼は永遠にスパルタ武士の魂を持ち続けるであろうぞ。(「斯巴達之魂」『浙江潮』第九期)

ギリシアを舞台にした小説に「武徳」「武士の魂」という言葉を使っているのは奇妙な感じを受けるが、これらの言葉は『浙江潮』等の留学生雑誌において頻繁にみられるものであった。『浙江潮』第一期の社説「国魂篇」第二節「国魂之定義」には立国するためには「国魂」が必要であると述べられており、其の一「冒険魂」、其の二「宗教魂」に続いて、其の三に「武士魂」を挙げている。

其の三に武士魂と曰う。武士魂は希臘に源を發し、今日に盛んに行われている。ドイツはその嫡子である。思うに、軍人は戦争時に必要とされるが、彼らの紀律を統一する精神は立国の本であり、剛毅豪壯の気魄は存続の源であり、競争と共同する敵愾心は愛国心が發達させる。故に帝國主義世界のなかでは、国家は必ず軍人精神で組織され、(国民が)進むときには共に進み、退くときは共に退かなければならず、思うにそうでなければ(国家は)成り立たない。アメリカは世で言う最も平和を好む国民である。しかし一旦戦争が起ると義勇兵が群れとなって集まる。十五、六歳の子供と雖も先を争って赴こうとしないものはない。ああ、アメリカが天下で最強の勢いがあるのは、思うにここに理由がある。すぐ東の日本もまた所謂大和魂を標榜して自ら得意がっている。大和魂とは何か。日本人の言う所謂武士道である。故に日本人は尚武でもって立国したのである。この魂があるゆえに維新が成功し、三島を睨視している。(「国魂篇」『浙江潮』第一期)。

明治日本において日露戦争後に「武士道」が日本国民の精神基盤であるという論が盛ん

に流行し始める。この「武士道」の称揚は、一八九九年に新渡戸稲造の『武士道』が英文で刊行されて以降、三神禮次著『日本武士道』⁽³⁾、山岡鐵舟口述、勝海舟評論『武士道』⁽⁴⁾などの刊行から始まる。これらの書物は既に当時死語に近かった「武士道」という言葉を用いて、日本人の国民性が武士道精神にあると論じたのであるが、もともとこの論自体は西洋へ向けた対外的な日本国民性論の宣伝という面を有していた。しかしその後その対外的な日本人論が国内へ跳ね返って武士道を日本古来から続く国民的特質として捉える考え方が定着していくのである。日本が近代国家として発展した原因は武士道精神にあるという論は、中国留学生の心を深く捉えて、中国において国民国家を形成していくためにはこの武士道精神と同様の精神的基盤を中国国民にも根付かせなくてはならないという思想の連鎖を引き起こす⁽⁵⁾。つまり「スパルタの魂」においては日本を通じての思想的連鎖がそのままテキストの形成過程に反映されているのである。ギリシアの歴史物語が近代日本に受容される時にねじれをもって受容され、それが中国からの留学生によって再度受容される際にもう一度ねじれを伴うという二重性を「スパルタの魂」から見てとれる。その思想的連鎖は作品と藍本との比較を通じて具体的に考察する必要がある。

そして、最後はこの作品の構成と文体について考察したい。この作品が魯迅の初期習作とみなされる理由として第一に考えられるのは、作品の内容だけではなく、むしろこの小説の形式が近代小説にふさわしくないとみされているからであろう。例えば、スパルタの戦士の妻であるセレーネが戦場から生還した夫を諫める情景描写する場面において、妻が夫を恥じる感情が科挙に例えて次のようにある。

読者はこれを非人情と疑われるかもしれない。しかしスパルタでは当然のことなのである。(略) 諸君見ても御覧なさい、試験に落第した者を。進士及第の通知が届かないと、妻は部屋の中で涙にくれる。感じ方はちがうが、情は同じなのである。ところが、夫は心変わりして、国のために死ぬことなど考えてもいないのである。どうして悲しまずにいられよう、立腹せずにいられよう(「斯巴達之魂」『浙江潮』第九期)。

このように、語り手が表面に顔を出して小説自体の意味やテーマに批評を加える叙述方法は従来の旧小説形式の域を脱していないとみなされ、小説の評価自体をより低いものにしてきた原因の一つとなっている。しかし、次のような一段もある。

ああ、二人の少年よ、今日生きながらえることとならんか、欣喜雀躍として故郷に帰り、父母や親友を呼び集めて再生の祝宴を張ると人は思うであろうか。だが、スパ

ルタ戦士にして、はたしてかかることがあろうか。ああ、わたしの聞くところでは次のようである。（「斯巴達之魂」『浙江潮』第五期）

ここで、読者に話しかけるのは「わたし（原文：我）」となっており、これは明らかに従来の旧小説の語り手のあり方とは異なっているのである。また、作品の構成も旧小説や歴史文献と異なる特徴を有しており、より詳細に考察する必要がある。

このようにこの作品はいくつか興味深い問題を提示しているが、先行研究における考察は十分ではなく、この作品を翻訳と断言する場合も創作とみなす場合もその根拠が明確には示されていない。そこで小論では以下の問題についてより詳しく考察したい。まず魯迅が留学していた当時の日本においてギリシア史に関する文献にはどのようなものが存在したのだろうか。また魯迅はそのなかからどのような文献を自らの作品に用いたのだろうか。明治期の日本におけるギリシア史受容を全体的に概観することによって、魯迅がどの文献を選び取ったかが浮かび上がってくるように思う。以上の問題を考察した上で、「スパルタの魂」の創作過程、人物形象、構成および文体について分析を加える。

I 執筆時期について

一九〇三年四月十七日の『東京朝日新聞』にロシアがその後に日露開戦へと傾斜する契機にもなる新七項目を突きつけてきたという報道が掲載され、『東京時事新報』の四月二八日号外にはロシア代理公使の東三省を取ってロシアの版図に入れるという談話が掲載される。留学生達はこの新聞記事を読んで強い危機感を感じ、義勇隊を組織して袁世凱の率いる北洋軍に投じる決議をする。この拒俄事件が本国に伝わると、中国国内において拒俄請願運動として大規模な学生運動を呼び起こし、学生たちは反帝愛国の目標を掲げて、北京、上海、杭州、武昌、安慶、南京などで互いに連絡を取り合い、大規模な集会を開いた⁽⁶⁾。拒俄事件は西洋式の教育を受けた学生たちによる初めての全国的な学生運動であり、五四運動へと続く反帝国主義運動の先駆けとなった。

それではこの拒俄事件の流れを日付を追って辿ってみよう⁽⁷⁾。『東京時事新報』に談話が掲載された翌日の四月二十九日に参加者五百人を集めた全留学生大会が神田錦輝館にて開催される。四月三十日、東京にいる留学生達のなかで、軍隊志望者百三十名、本部員五十名余りが登録し、各省同郷会の賛同を得る。五月二日、義勇隊の名前が学生軍と改名され、五月三日には軍隊の編成を四分隊に分けて部署を定め、五月四日には任務を分担し、五月五日には学生軍課程表を会館に掲示して体制を整える。しかし五月七日に至ると、日本の

外務省がこの件に干渉したため、学生軍の解散、軍事講習会への改組の危機に直面する。五月十日に至り、改組の正式な会合が開かれ、五月十一日には軍国民教育会結成大会が開かれる。そして五月十四日に、鈕永建、湯樞が特派員として上海経由で天津へ袁世凱に会見を求めに行く。

しかし、五月二七日になると事態は一変する。東京での活動の実権が青年会派に移り、排満民族主義という政治的立場を軍国民教育会に注入したため、清朝による弾圧を招くことになったからである。蔡鈞から湖広総督端方への通告、端方から沿江海各省の総督への転告があり、清朝側は帰国者に監視体制をとるようになる。この清国の弾圧の動きを報じたのが『蘇報』である。五月下旬から六月上旬にかけての清朝政府による弾圧の際には、鄒容の「革命軍」、章炳麟の「康有為を駁して革命を論ずるの書」が公表宣伝された。七月五日、上海から特派員が帰国する。この時期には活動は既に完全非公開の活動へと移行している。七月十一日には組織そのものになんらかの圧力がかかり、組織自体を解散せざるをえなくなる。

五月十五日発行の『浙江潮』第四期には、先のテルモピュライに言及した北洋大臣へ宛てた書簡が掲載されている。魯迅の「スバルタの魂」は前半部分が『浙江潮』第五期に掲載され、後半部分は第九期に掲載された。ただ内容的な区切りからすると、前半部分と後半部分の切れ目には断絶が全く無いので、一気に創作された後に二回に分けて掲載したと考えられる⁽⁸⁾。『浙江潮』第四期は陰暦四月十五日（陽暦五月十一日）に印刷、四月二十日（陽暦五月十六日）に発行されている。『浙江潮』第五期は陰暦五月十五日（陽暦六月十日）に印刷され、陰暦五月二十日（陽暦六月十五日）に発行されている。ただ、この年は閏年にあたり、陰暦の五月は二度あり、印刷された陰暦五月十五日を閏五月とすると、陽暦では七月九日である。しかし『浙江潮』第五期には特派員の送別会の様子が掲載され、『浙江潮』第六期の「留学界記事」には特派員が七月三日に日本に帰ってきた記事が載せられているので、第五期の発行は五月末から六月末あたりであると思われる。

魯迅が『浙江潮』第四期に掲載された記事を見た後に「スバルタの魂」を執筆したと考えるなら、五月十六日から七月九日までの間に執筆したと思われる。五月十四日に鈕永建、湯樞が特派員として上海経由で天津へ袁世凱に会見を求めに行った頃から、日本の外務省が学生軍の解散を迫り、二七日に清朝の弾圧が加わり、清国が管理体制をとって活動が非公開になる。事件の流れと照らし合わせると、ちょうど学生義勇軍が北伐軍へ投じられることを中国側に求めに行った時期から清朝政府に弾圧を加えられて活動が非公開になる一連の事件が起こる全期間にあたっているのである。ただ、これは『浙江潮』第四期に掲載された手紙を読んだ後に魯迅がこの作品を創作したという前提から推測したものである。魯迅

の執筆時期を正確に絞るのは難しい。

魯迅の旧友である許寿裳は魯迅に原稿を頼むと二日間で仕上げてもってきたと述べている⁽⁹⁾。

この時、私と魯迅は既にかなり親しかった。私は彼が寂しさを感じていると思ったが、実は私自身もまた孤独であった。ちょうど『浙江潮』の編集を引き受けたばかりだったので、私は彼に原稿を求めた。彼は一言で引き受けてくれて、一日おいてから一編——『スパルタの魂』を提出した。謙虚なふりをして断ったり、逃げたり引伸ばしたりしない彼の態度は他の人とは全く異なっており、承諾の早さと寄稿の早さは本当に私を敬服させたのであった。この文章は少年の作であり、スパルタの物語を借りて我々民族の尚武精神を鼓舞するものであった。

たった二日間で仕上げたというのは、魯迅が執筆以前にもギリシアの歴史にかなり関心をもっており、関連文献を読んでいた可能性が強い。魯迅は平素から知識と資料を既に蓄積しており、この事件をきっかけにして「スパルタの魂」に結実したとみるのが妥当と思われる。

II 「スパルタの魂」と明治期のギリシア史

魯迅の「スパルタの魂」はギリシアとペルシアの戦争、テルモピュライの役を題材にして作られている。テルモピュライの役は、スパルタ王レオニダスがペルシア軍の圧倒的に有利な軍勢を前に、死を覚悟して要所テルモピュライに留まり、親衛隊三百人と共に玉砕を果たしてペルシアのギリシア侵攻を食い止めようとした戦闘である。それでは、テルモピュライの役について、ヘロドトスの『歴史』に従って戦闘の経緯を見てみよう⁽¹⁰⁾。

紀元前四八〇年、スパルタ王レオニダスは西からギリシアへ攻め入ろうとしたペルシア軍をテルモピュライで待ち受けていた。テルモピュライの地形は背面にオイテ山へと連なる険峻な高山を控えており、反対は海に接している。そのためギリシアへと続く隘路は一輦の車が通れるぐらいの道幅しかなく、要所として適していた。そこでギリシア同盟軍はここにペルシア軍を迎え撃つ陣を構えることにした。しかしスパルタ軍がテルモピュライに到着後、山を抜ける間道の存在を知らされる。そこでこの間道に地元のボキス人を配備して防備に当たらせることにした。

数的には圧倒的に優勢であるペルシア軍は余裕の構えであり、ペルシア王はスパルタが

戦わずして退却すると考えていた。しかしペルシア王が斥候をしてスパルタ軍の様子を探らせると、スパルタの戦士は髪を梳り、体操をして余裕の構えであった。ペルシア王が驚くと、デマラトスがそれはスパルタの戦士が死を覚悟している証拠であると告げた。ペルシア王は半信半疑であり、「不死部隊（アタナトイ）」という精鋭部隊のみを遣わせて戦わせたが、スパルタ軍は意外なほど強く、目覚しい成果を挙げることができなかった。その時、エピアルテスという者がテルモピュライの隘路を通らずに山越えをする間道の存在をペルシア王に密告したのである。ギリシア同盟軍はペルシア軍がこの間道を通してギリシアを攻めているという情報を得ると、総崩れを起こして退却することを決定する。しかしレオニダス率いる親衛隊の三百人は死を覚悟してこの地に留まり、激戦の末に全滅した。

このテルモピュライの戦闘中に、スパルタの戦士であるエウリュトスとアリストデモスは重い眼病を患い、決戦時にアルペノイで病床に就いていた。戦闘が始まると、エウリュトスは従者に前線へ連れて行かせ討ち死を果たした。しかし、アリストデモスはスパルタへ生還するが、皆から臆病者として非難されて、汚名を濯ぐためにプラタイアの戦いで戦死した。

以上がヘロドトスの『歴史』に描かれたテルモピュライの役である。「スパルタの魂」はこのテルモピュライの役を題材にしているが、ヘロドトスの『歴史』と「スパルタの魂」とでは大きく異なる部分がある。「スパルタの魂」を内容的な区切りで分けると、テルモピュライの役を扱った前半部分とスパルタの戦士アリストデモスの妻が生還した夫を諫めて自殺する後半部分に分かれている。興味深いのはこの前半部分が史実に基づき比較的正確に構成されているのに対し、後半部分は全く史実には出てこない事が書かれていることである。そして、その書き方も前半部分が簡単に史実を追う記述であるのに対し、後半部分はアリストデモスとその妻のやり取りを詳細に描くなどの方法が採用されている。そのため、前半部分と後半部分は内容的にも形式的にも断絶した構成となっている。

樽本氏は前半部分が日本の翻訳文献によっており、後半部分は魯迅の創作によるものではないか、と推測している。前半部分について、樽本氏は固有名詞の訳に注目し、魯迅が当時の日本文献を参照としたであろうと推測してその文献を探索している。例えば、ギリシアを攻めたペルシア王の名前「クセルクセス」を魯迅が「沢耳士」と訳しているのを例に挙げ、明治のギリシア史の文献には既に「クセルクセス」を「沢耳士」と訳す例がみられると述べている。また、戦場となった「テルモピュライ」を『浙江潮』に載った北洋大臣宛ての手紙では「徳摩比勒」と音訳しているが、魯迅は「温泉門」と訳している。これも魯迅が日本の文献を参照とした可能性が高いと樽本氏は述べている。ほかにも、ペルシアの精鋭部隊である「アタナトイ」を魯迅は音訳せずに「不死軍」と訳したのもやはり日

本語の文献によったという証拠であると述べている。以上の理由から、樽本氏は魯迅が何らかの日本文献に拠ったのは確かだろうと推測している⁽¹¹⁾。

ただ、テルモピュライの役について詳述しているヘロドトスの『歴史』の完訳は当時まだ存在していなかった。また、このヘロドトスの『歴史』と「スパルタの魂」は内容的にもずれがある。例えば、迂回路の密告者であるエピアルテスについて、ヘロドトスの『歴史』は「トラキス人」としているが、魯迅は「テッサリア人」としている。他にもヘロドトスの『歴史』以外に「スパルタの魂」のなかにはプルタルコスPlutarchの著作からの引用例が三例混じっている。そこで、樽本氏は「ヘロドトスとプルタルコスを混合して記述されたもとの文章（欧米の文献）があって、それを日本語に重訳した文章、それも複数から魯迅は材料を得ているのではないか。」という結論に達している⁽¹²⁾。筆者も樽本氏の説に基本的には反対はしないが、この問題についてより詳細に考えてみたいと思う。

まず、管見が及ぶ限り、日本におけるギリシア史の受容から概観してみよう。明治十年、二十年代に、詳細な各国史が日本に紹介されることは非常に稀であり、ギリシア史は主に世界史の一部として日本に紹介された。パレーの『万国史』のなかにはギリシア史が含まれている⁽¹³⁾。その他の世界史にも同様にギリシア史が含まれている⁽¹⁴⁾。明治六年から刊行された『文部省百科全書』のなかに永井久一郎訳「希臘史篇」が入っており⁽¹⁵⁾、また明治十七年から刊行されたウィルテム・チャンブル、ロベルト・チャンブル編『百科全書』の第八・九巻にも「希臘史、羅馬史」が入っている⁽¹⁶⁾。明治十二年に刊行された岡本監輔著『万国史記』のなかにもギリシア史が入っている。明治二三年の『万国歴史全書』第六編には宮川鉄次郎著「希臘羅馬史」が含まれている⁽¹⁷⁾。

本格的なギリシア史の専門翻訳書が出版されたのは、楯岡良知等訳『希臘史略』からであろう。これは、Elizabeth Missing Sewell の *A First History of Greece* から翻訳したもので、子供向けのギリシア史であるという。この本は明治五年に刊行された。これは日本において非常に早いギリシア史であり、かなり例外的である。この本は他に別の翻訳があり、松尾久太郎訳『希臘史直訳』として明治二一年十二月に出版されている⁽¹⁸⁾。

明治二十年代において詳しいギリシア史の翻訳は少ないが何冊か存在している。明治二十六年の桑原啓一編訳『新編希臘歴史』、渋谷保著『希臘波斯戦史』である。前者は凡例に「本書は主としてウイリアム、スミツス (William Smith) 氏の希臘歴史に拠り、傍ら諸書を参酌して之を訳術したり」と述べているので、William Smith の *A History of Greece, from the Earliest Times to the Roman Conquest* の翻訳である。この本は学生用テキストと作られたらしいが、かなり詳細に書かれている⁽¹⁹⁾。渋谷保著『希臘波斯戦史』はヘロドトスの『歴史』、プルタルコスの『英雄伝』などの複数の英文原典を参照とし、その異同

に関しても書中で詳細に述べるかたちで構成されている⁽²⁰⁾。この時期で一番詳しいギリシア史である。

明治二十年代にはヘロドトスの『歴史』、プルタルコスの『英雄伝』といった名作は断片的には万国史やその他の翻訳書のなかに組み込まれているが、全訳はまだ出版されていない。明治三十年代になると、大学講義用テキストとして、ヘロドトスの『歴史』、プルタルコスの『英雄伝』といった名作の翻訳が出版され始める。明治三五年の『史学雑誌』に掲載された「早稲田専門学校史学科講義録」で次のようにある。「史学科講義録はこれを在来のものに比して、殆んど学科の全部を更め、専ら記述の史を公にし、又新に受験欄を設け、文部省の教員検定試験に於ける歴史の問題につき、懇切なる解釈を加え、これを登載する由なれば、歴史を研究せんとする者、及受験者のためには頗る裨益する所あるべし、尚新講義録は十月初旬に第一号を出し、爾後毎月十二日及廿八日の両度これを発行し、満二カ年を以て全部完結すべく、担当講師及学課目は左の如しと云ふ⁽²¹⁾」。この講義録によると、第一学年では、浮田和民が「ギリシア史ロオマ史」を講義し、新見吉治が伝記として「プルタルコス偉人伝」を講義し、坂本健一が「ロオマ法王史」を講義している。第二学年では、坂本健一は「ロシア史」を講義し、新見吉治は一学年と同じく「プルタルコス偉人伝」を講義している。

その後これらの講義録は大学から出版される。坂本健一はヘロドトスの『歴史』の一部を訳して、明治三九年に「早稲田大学出版部」から、『ヘロドトス』（早稲田大学卅七年度歴史地理第二学年講義録）と題して出版している⁽²²⁾。全訳は一九一四年に隆文館から『ヘロドトス』と題して出版されており、この本の序にヘロドトスの『歴史』は二十年前に読んでいたと述べられている⁽²³⁾。浮田和民は「東京専門学校文学科第三回第一部講義録」として『西洋上古史』を出版している⁽²⁴⁾。明治三五年には『稿本希臘史』が「歴史叢書」として早稲田大学出版部から出版されている。これらは先に挙げたウイリアム・スミスの *A History of Greece* などのギリシア史を簡約にまとめて抄訳したものである⁽²⁵⁾。明治三八年に同名の書物が「早稲田大学卅八年度政治経済科第一学年講義録」、及び明治四十年に「早稲田大学卅九年度歴史地理科第一学年講義録」として出版されている⁽²⁶⁾。プルタルコスの『英雄伝』は、「早稲田大学卅六年度史学科第二学年講義録」として、明治三八年に新見吉治が『プルタルコス偉人伝』として早稲田大学出版部から出版している。この本は、「東京専門学校講義録」として明治三五年に出版されたものと同じものと思われる⁽²⁷⁾。

以上、明治初期におけるギリシア史の概観について述べたが、魯迅が「スパルタの魂」を執筆した時点においてヘロドトスの『歴史』は出版されておらず、この時期の一番詳細

なギリシア史は桑原啓一編訳『新編希臘歴史』、洪江保著『希臘波斯戦史』、浮田和民の『西洋上古史』、『稿本希臘史』である。これらの諸本と魯迅の「スパルタの魂」を照合してみると、これらのギリシア史がかなり簡略にしかテルモピュライの役について記述していないのに対し、魯迅の「スパルタの魂」はこれらの翻訳書以上に詳細にテルモピュライの役を描いていることに気づく。魯迅の「スパルタの魂」にはこれらのギリシア史に記述されていない幾つかの逸話が書かれている。以下、幾つかの逸話を列挙してみよう。

- (一) 占者のメギスティアスがレオニダス王の死を予見し、スパルタ軍とともに討死した逸話。
- (二) デルポイの神殿で、スパルタの国土が蹂躪されるか、もしくはスパルタ王が討死するかという神託を受けたという逸話。
- (三) レオニダス王は親類の若者二人をスパルタへ送り返そうとするが、二人は戦場に踏みとどまり、討死する逸話。
- (四) 眼病を患ったエウリュトスが従卒の奴隷と共に戦場へと赴き討死する逸話。

文献	時期	(一)	(二)	(三)	(四)
ヘロドトスの『歴史』		あり	あり	なし	あり(異)
『新編希臘歴史』	1893年(明26年)	なし	なし	なし	なし
『希臘波斯戦史』	1896年(明29年)	あり	なし	なし	あり(異)
『稿本希臘史』	1902年(明35年)	なし	なし	なし	あり(異)
『少年文武』	1890年(明23年)	なし	なし	なし	なし
『日本之少年』	1891年(明24年)	あり	あり	あり	なし
『尚武雑誌』	1891年(明24年)	未見	あり	未見	未見
『少年園』	1892年(明25年)	あり	あり	あり	あり(異)
『婦人と子ども』	1903年(明36年)	あり	あり	あり	あり(異)

洪江保著『希臘波斯戦史』は基本的にはヘロドトスの『歴史』に沿って記述されているので、逸話(一)、(四)はある。ただ(四)の場合、『歴史』の記載と同じく、従卒の奴隷は主人と共に討死するのではなく逃げてしまうことになっている。浮田和民の『稿本希臘史』に(四)が掲載されている。他のギリシア史の文献はこれらの逸話を全く載せていない。この事実からみて、明らかに魯迅は以上の歴史文献よりも詳細な文献を参照したはずである。魯迅の「スパルタの魂」は基本的にはヘロドトスの『歴史』に記載された逸話を作品に取り入れているだけではなく、『歴史』にない逸話(三)までも載せているのである。

Ⅲ 明治期の少年雑誌記事と「スパルタの魂」

それでは、魯迅は何を参照にしてこれらの逸話を「スパルタの魂」のなかに書き加えたのだろうか。先述した留学生達が北洋大臣にあてた書簡のなかに、「今にいたるまでテルモピュライの役は、栄名を列国にとどろかせている。泰西では三尺の童子といえども、これを知らぬはない。」という一段に注目したい。当時の在日留学生はテルモピュライの役が欧米では子供でも知っているような有名な物語と考えたのはなぜだろうか。

そこで、筆者は明治時代の少年雑誌、婦人誌の記事に注目をした。明治期の少年雑誌などの資料を調べ、管見の及ぶ限りで、テルモピュライの役に関する記事として、以下のような文献をみつけた。

梅溪樵夫「テルモピュレーの落城」『少年文武』第一年第十冊、一八九〇年（明治二三年）

菜花園主人「聖れもびれい大戦争」『日本之少年』第三卷第一～四号、一八九一年（明治二四年）

鯉淵焚「熱門の決戦（上）（中）」『尚武雑誌』第一・二号、一八九一年（明治二四年）

不明「セルモピレーの大戦」『少年園』第九二号、一八九二年（明治二五年）

米溪「大題小題二 サーマピレーの戦」『婦人と子ども』第三卷第六・七・十・十一号、一九〇三年（明治三六年）

在日中国留学生たちは明治期の少年雑誌にテルモピュライの役が記事として掲載されていたのを見て、欧米では子供も知っているかと推測したのではないだろうか。このような児童読物のなかで代表的な雑誌『少年園』は高等小学から尋常中学生までぐらいの読者を対象として作られた課外読物であり、一八八八年（明治二年）十一月に山県悌三郎によって創刊された。この少年雑誌の質は非常に高く、徳富蘇峰の『国民之友』と対で並び称されるほどであり、少年読み物のエポック・メイキング的な存在であった。『少年園』は政府の教育方針に沿って、少年に忠君愛国意識を培養して将来の国家の担い手を育てることを目的として編集された。執筆者も当代一流の教育者、文芸家を網羅していた。例えば、東海散士、森鷗外、坪内逍遙、山田美妙などが執筆している。そのため当時の少年に大きな影響力を持っていた。編集方針は以前の少年雑誌と一線を画していたので、後に発刊される『日本之少年』（一八八九年二月）、『こども』（一八八九年三月）、『小国民』（一八八九年七月）、『少年文武』（一八九〇年一月）などにも影響を与えたと言われる⁽²⁸⁾。

明治二十年代は明治維新直後と異なり、天皇制国家の形態が整備されて秩序が安定に向かっていく時期でもある。少年は未来の国の担い手として勉学に勤しみ国家に尽くすべきであり、同時にそれは自己の前途を開く道筋でもあった。そこで、これらの少年雑誌は立身出世主義を奨励している。少年達にとって、雑誌に掲載された「史伝」の偉人達は立身出世の模範であった。一八九四年に日清戦争が始まると、これに日本軍の忠烈義勇を賞賛する論調が加わることになる⁽²⁹⁾。テルモピュライの役についても、このような文脈で少年誌に掲載された。絶望的な状況においても諦めず最後まで戦いとおして玉砕したレオニダスは、その愛国的勇者ぶりを惜しみなく称えられている。

爾来星移り物変わりて茲に二千三百年余此石獅子円柱碑銘は、既に廢滅に歸して其痕を止めず、且つ彼の古戰場も亦桑滄の変を経て地勢大に變じ、今はエータ山と海湾の間に数里の平原を見るに至りて、所謂熱門なる所なし。然れども石よりも金よりも、否其戰場よりも、千古に亘りて朽ちざるは、レオニダスの名にぞ有りける（「セルモピレーの大戦」『少年園』第九二号、十七頁）。

また『日本之少年』の記事には次のようにある。

不幸なる俊傑レオニダスは死せしなり危臘無二の愛国者なる危臘無二の俊傑なるスパルタ国王レオニダスは愛国の死士数百人と共に百万の波斯軍と駆け難まし刀折れ矢竭きて身潔くセルモピレーの露と消えたるなり（略）一千有余の手兵皆枕を同して陣頭に臥し其生きてスパルタに帰りしものハ少かに一人の老兵ありしのみされば後世の危臘人等皆レオニダス等の武勇を慕ひ其余徳に感ずるの余り鉄製の一大獅獸を作りて其地に安置し以て勇士が武徳を表するの紀念標をなせしと云ふ（「聖れもびれい大戦争」『日本之少年』第三卷第六号、二五頁）。

また戦争に勝つためには男子だけではなく、女子も同じ心構えをもって当たらなければならず、このような愛国の志気はまず子どもを育てる女性から養わなくてはいけない⁽³⁰⁾。婦人雑誌に戦争を題材とするテルモピュライの役が掲載されている理由もここにある。『婦人と子ども』の冒頭部分ではこのように説明している。

軍さ物語りは、婦人の耳に疎きも、男の子の最も喜ぶ所、賤が獄の七本槍は、お祖母さんの御伽話に馴れたるべく、楠正成の話は、絵草紙の説明に聞き飽きもしたらん、

さればとて之は耳新しき材料とにはあらざるも、稍目先きの変わると、其の事の壮烈とは、聊か又御伽話の一助にもならんか、夫にても男の子にとのみのものにもあらざるべしと思ひて筆採りぬ。(「大題小題二 サーマピレーの戦」『婦人と子ども』第三卷第六号、三三頁)

この『婦人と子ども』に掲載された記事ではレオニダス王の王妃ゴルゴが強調して描かれ、スパルタの女性は戦場へ赴く夫を支え、また未来の国の担い手となる息子を育てる形象として描かれている。そしてレオニダス王の武勇とそれを影で支える女性を称える内容はこれらの一連の雑誌記事において一貫した描かれ方となっているのである。

これら日本の雑誌記事が参照とした欧米文献を辿るのは難しいが、洪江保著『希臘波斯戦史』(「万国戦史」第二四編、博文館、一八九六年九月)に参考文献として、「Herodotus, Grote's A History of Greece, Cutiu's The History of Greece, Smith's History of Greece, Fyffe's Primer Greece」が列記してあり、ここから当時の知識人が一般的にギリシア史を受容する際に参考とした欧米文献が推測できる。そしてこのなかでも、「Smith's History of Greece」はWilliam SmithのA History of Greece, from the Earliest Times to the Roman Conquestであり、桑原啓一によって翻訳されて編訳『新編希臘歴史』(経済雑誌社、一八九三年十月)として出版されている。これらの少年雑誌に載せられた記事はヘロドトスの『歴史』とプルタルコスの『英雄伝』の原典、もしくはそれらをもととした欧米のギリシア歴史書を参照し、愛国精神を加えて改作して作られたと推測される。『婦人と子ども』に掲載された米溪「大題小題二 サーマピレーの戦」の附言に「大題小題なる名の下に誠に断片的の材料を蒐集し既に此の紙上に掲載せるものも数次なるか」とある⁽³¹⁾。欧米文献にはヘロドトスとプルタルコスを混合した文献はなく、プルタルコスの『英雄伝』を引用するのは日本雑誌記事の著者による創作と思われる。また挿入された固有名詞、逸話にはある種の共通性が見いだせるので、年代の下がる記事は前に載せられた雑誌記事を参照として書かれたらしい。

魯迅は「スパルタの魂」を書くに当たって上に挙げた雑誌記事を材源とした可能性が高い。『少年園』には先に挙げた逸話が四つとも全て掲載されている。『婦人と子ども』にも全ての逸話が載っている。ただ、時期的に考えて、魯迅が『婦人と子ども』に掲載された記事のうち、第三卷第六・七号の部分を除く第十・十一号を参照した可能性は低い。『婦人と子ども』に掲載された米溪「大題小題二 サーマピレーの戦」は一九〇三年(明治三六年)の第三卷第六・七・十・十一号の四回にわたって掲載された。一回目は一九〇三年六月五日に史伝の欄に掲載されている。二回目は一九〇三年七月五日。三回目は

一九〇三年十月五日。四回目は十一月五日。先述のとおり、魯迅の「スパルタの魂」の執筆時期は五月十五日から七月九日までぐらいと推測される。許寿裳の依頼を受けた二日後に「スパルタ魂」を持ってきたとあるので、一九〇三年六月五日と七月五日に発刊された『婦人と子ども』に掲載された記事、第三巻第六・七号を参照とした可能性はあるが、それ以後に掲載された部分は執筆時点では見ていなかったと思われる。

以上から次のことが推測される。魯迅は『婦人と子供』に掲載された記事のうち、一番初めの記事を見て、「スパルタの魂」を創作しようと思いつく。この『婦人と子供』に掲載された記事は時期的にもちょうど魯迅が「スパルタの魂」を創作する直前に雑誌に載せられたものなので、魯迅は偶然にそれが掲載された号を手にした可能性がある。そしてこの雑誌は女性向けに編集されているという性質上、レオニダス王を支える妻のゴルゴ王妃が強調して描かれている。これは「スパルタの魂」の後半部分において重要な役割を果たすセレーネという女性の形象を魯迅が創作するのに示唆を与えたと思われる。また魯迅は「テルモピュライ」を「温泉門」と訳しているが、『婦人と子供』の記事では「テルモピュライ」の訳語に「温泉ある暑き門」という注釈を加えている。他のテルモピュライの訳語を見てみると、『少年文武』は「セルモピレー」、『日本之少年』は「テルモピレー」、『尚武雑誌』は「熱門」、『少年園』は「熱門」となっている。他にギリシアの歴史書では、『希臘波斯戦史』は「暖門」、『新編希臘歴史』は「セルモピリー」、『稿本希臘史』は「セルモピリー」となっている。

ただ、『婦人と子供』に載せられた記事は未完であったので、魯迅は後半部分に関しては他の雑誌を参照としたのでないかと思われる。一八九二年（明治二五年）『少年園』に掲載された「セルモピレーの大戦」は William Smith の A History of Greece, from the Earliest Times to the Roman Conquest を基にしてそれを脚色するかたちで書かれている。先述のように、このウイリアム・スミスのギリシア史は記事が掲載された一年後の明治二六年に桑原啓一編訳『新編希臘歴史』として翻訳出版されているが、テルモピュライの役に関する部分は簡約な抄訳となっており、むしろ『少年園』に掲載された記事の方が詳細である。この『少年園』には『歴史』にも載せられていない逸話（三）が載せられている。逸話（三）は、レオニダス王は全滅を覚悟した際に、親戚である若者の二人をスパルタへ送り返そうとするが、二人は踏みとどまるという逸話である。『少年園』の記事ではその部分が以下のようになっている。

レオニダスの陣中に、同じくヘルクリスの血統を受けたる親族二人ありけるが、レオニダスは、これを救はんと欲し、書信を齎らしてスパルタに使すべき旨を命じたる

に、其一人は答へて曰く、余は戦はんとて来れるなり、手紙を持ち帰らんがため来りしに非ずと。又他の一人は、余の仕事はよくスパルタの知らんと欲する所を知らすべし、又書信を待つに及ばず、とて帰るを否みたり。（「セルモピレーの大戦」『少年園』第九二号、十五頁）

また魯迅は次のように書いている。

ああ、二人の少年よ、今日生きながらえることとならんか、欣喜雀躍として故郷に帰り、父母や親友を呼び集めて祝宴を張ると人は思うであろうか。だが、スパルタの戦士にして、はたしてスパルタの武士にして、はたしてかかることがあるであろうか。ああ、わたしの聞くところはつぎのようである。

王は語りかけつつ、まだ産毛が残っている二人の顔をじっと見つめた。

王「お前たちは、死を目前にしていることを知っておるかな」

少年甲「はい、存じております。陛下」

王「いったい、なにゆえに死ぬのか」

甲「申し上げるまでもございません。戦って死ぬのでございます。戦って死ぬのでございます」

甲乙「臣らもとより望むところでございます」

王「しからは、お前たちはこの書面を持って故国に帰り、戦況を報告せよ」

ああ、なんたることか。王はいったい、何をお考えなのか、若者は愕然として耳を疑い、全軍は肅然としてしわぶき一つなく、一語も聞きもらすまじと耳を澄ます。

と、若者は茫然自失のなかから我にかえり、声をはげまして王に答えた。

「王は私を生かしておこうとお考えなのでございますか。臣は盾を執って参上いたしました。しかし、書面を届ける飛脚となろうとてではございませぬ」

決意は堅い。必死の形相である。志を奪うことはできない。

しかしながら、王はなおも甲を派遣しようとした。しかし甲は詔を奉じようとはせぬ。で、乙を派遣しようとした。しかし、乙とても詔を奉じはしない。

「今日の戦さこそは、国の人々に報いるゆえんでございます」

ああ、志をかえさせることはできないのである。王はやむなく言う。

「あっぱれな者よ、それでこそスパルタの武士じゃ。もはや何も言うまいぞ」（「斯巴達之魂」『浙江潮』第五期）

「スパルタの魂」のこの部分はここから来ていると思われる。実は、この逸話はヘロドトスの『歴史』には載せられていない逸話で、出典が不明である。この逸話を載せているのは『日本之少年』、『少年園』、『婦人と子ども』の三つしかない。魯迅は『婦人と子供』のこの部分は時期的に見ていないはずであり、『日本之少年』は王の親戚ではなく、二人の義父となっている。

魯迅が『少年園』の記事を見たのではないかというもう一つの根拠は、レオニダス王とスパルタ兵のために立てた記念碑の碑銘の訳である。英文では“Go, tell the Spartans, thou that passest by, that here obedient to their laws we lie”と書かれている。『少年園』では「スパルタに行きて語れよ旅人、国のため我々がここに死せしことを。」となっている。魯迅は「汝旅人兮，我从国法而战死，其告我斯巴达之同胞。」としている。魯迅の「旅人」の訳はここから来ているのではないかと推測される。『新編希臘歴史』は同じ部分を「此所を通過する者は往てスパルタ人に告げよ、我々が国法を奉じてここに斃れしことを」と訳し、『希臘波斯戦史』は英文のままで訳されていない。以上から魯迅は『少年園』に載せられた記事を参照としたのではないと思われる。

ただ「スパルタの魂」におけるギリシアの具体的な人名、地名、数字などはこれらの雑誌記事ではなく、ギリシアの歴史書によっているのではないと思われる(附参照)。また、上記した記事以外にも類似した記事が当時の雑誌に掲載されている可能性は残っており、魯迅がそれを参照とした可能性も否定できない。この作品は多くの文献を参照として構成されているので、参照とした文献の一つに絞るのは難しい。ただ、筆者は調べた限りではそのような文献はみつからなかった⁽³²⁾。

IV 「スパルタの魂」におけるセレーネの形象

「スパルタの魂」の後半部分は、スパルタの親衛隊のアリストデモスが眼病で戦わずして生還すると、妻セレーネは生還した夫を恥じて自殺してしまうという物語となっている。これは戦場へ赴く夫を陰で気丈に支える女性像という記事のテーマを敷衍して作られたものであろうことが推測される。アリストデモスはエウリュトスと同様に重い眼病を患ってアルペノイで病床に就いており、彼らが戦役に参加するかどうかの選択は自らの判断に任されていた。エウリュトスは従卒の奴隷と共に戦場へ赴き討死をしたが、アリストデモスはそのままスパルタへと生還した。アリストデモスの妻であるセレーネは戦死したと思ひ込んでいた夫が生還し、驚くと同時にそれを恥と感じる。夫が帰還したその晩、妻のセレーネはアリストデモスを責めて口論となり、夫の行為を戒めるために自害してしまう。その

後、アリストデモスは恥辱を注ぐためにプラタイアの戦闘において討死をする。

この夫を責めて自殺するアリストデモスの妻、セレーネという形象はヘロドトスの『歴史』にも他の歴史書にも全く記載されておらず、少年誌の記事にもない。魯迅の全くの創作であると思われる。ではこのセレーネの形象はどのように作られたのであろうか。

『少年園』にはレオニダス王の妻、ゴルゴについて次のように書かれている。

加之レオニダスの妃ゴルゴは、頗る胆畧ある婦人にして、首途に血迷ふ如き心弱き素振なし。未だ幼かりし時、波斯王甘言を以て其父を迷はさんとせしに、之を看破して、父に断然斥けしめし事ありき。スパルタの婦人は、皆此ゴルゴの如き氣象を有し、其夫又は其愛子の出陣を送るには、『楯を持ちて帰れ、然らずんば楯に乗りて帰れ』との言を以てしたり。蓋し勝利を得て帰れ、然らざれば屍を楯に乗せて帰るべしの意なり。かかる妻ありかかる母あるとなれば、レオニダスと其三百の兵士とが、必死を期して出陣したるも亦宜なり（「セルモピレーの大戦」『少年園』第九二号、十三頁）

また、『婦人と子供』には次のようにある。

況んや、彼のレオニダスの妻の如きに於てをや国滅びんとして、四境悲風満つ、起つて、此の難を濟するものなくんば、蒼生を如何んせん。是の時に当りて、此の夫あるを知る、何為ぞ、紅閨夢裡の涙にむせびて、其の前途を沮止するが如く怯ならんや。（略）

当時、スパルタの婦人等、其の良人の戦に臨むや、訣別に際し、相告げて曰く、請ふ、楯を手にして帰るを得ずんば、之に乗じて帰れと。

嗚呼、之れ涙なきか、真に涙なき乎、否、唯だ離別の間に滴かざるのみ。スパルタの精神教育は遂に、婦人をして、其の遠征の良人に驢するに此の言葉を以てせしめ、男子をして、其の戦に臨むに、彼の決心を以てせしむ。

記せよ、楯を鼓して、凱歌を奏する能はずんば楯に乗る死尸となりて環れとは、其の最愛の、妻の唇より漏るる詞なることを。

恥あるもの、誰れか奮はざらんや。其の情や、誠に、悲愴を極むと雖ども、其の事や、実に、烈日秋霜の如く、千古に亘りて、人の肺肝に徹するものあるを覚ふ。

嗚呼、豈涙なからんや。凜乎たる精神は、遂に之を滴ぐを容さざるなり（「大題小題二 サーモピレーの戦」『婦人と子ども』第三卷第六号、三七・三八頁）。

アリストデモスの妻、セレーネの登場場面は次のように描写されている。

しばらくすると、若い嫁が老婆を送り出し、切々として別離の言葉をかけていたが、身をひるがえすと、かたりと音をたてて門口を閉ざし、やるせない思いで閨のうちにいった。豆のように小さな灯火が一つともるばかり、語り合うのはただ影のみである。頭髪が飛蓬のように乱れているのも、身づくろいするための主がないからである。おそらく出産を控えて、剛勇強毅の男子を産み、国民のためにお役に立ちたい、と心の中で祈っているのであろう。ときに、天地は寂寥、身にしみる風が窓を叩く。思いは心のうちに波うって言葉とはならず、ただ嘆息の音が聞こえるようである。戦場の夫を憶っているのであろうか。砂漠の戦場を夢見ているのであろうか。ああ、この美わしき若嫁、女丈夫にして、いったい、嘆息などということは、スパルタの女子のすることなのであるか。思うに、スパルタの女子のみが男子を支配することができ、スパルタの女子のみが男子を産むことができたのである。これはレオニダス王の後のゴルゴが、外国の女王に答えた言葉ではなかったか（「斯巴達之魂」『浙江潮』第五期）。

ここにはレオニダス王後のゴルゴが「スパルタの女子のみが男子を支配することができ、スパルタの女子のみが男子を産むことができたのである」と言った言葉が加えられている。この言葉はプルタルコス『英雄伝』を出典としている。また、同じくスパルタの女性が息子の出征に際して言った言葉「請ふ、楯を手にして帰るを得ずんば、之に乗じて帰れ」は、他の場面においてセレーネの科白に用いられている。

若妻は言う。「あなたはスパルタの武士なんですか。なぜそんなことが言えるのですか？無駄死にをするのに甘んじることができないから、おめおめと生きて帰ってきたなんて。それではあの三百人はなぜ戦死したのでしょうか。ああ、あなたはなんという人でしょう。勝たざれば即ち死すというスパルタの国法を忘れたのですか。(略)『請ふ、楯を手にして帰るを得ずんば、之に乗じて帰れ』というのはもう聞き慣れているはずなのに…眼を患っていることがスパルタの武士の栄光よりも重いことでしょうか。(「斯巴達之魂」『浙江潮』第九期)

この「楯を鼓して、凱歌を奏する能はずんば楯に乗る死尸となりて環れ」の言葉はギリシアの歴史書には全く載せられておらず、少年雑誌の記事の方には一様に掲載されている。

これは日本の記事の執筆者が『英雄伝』から取ってきて付け加えたものである。

他にもセレーネの科白に「男の子で弱い児ならばタユゲトス山に捨てる」という言葉が『英雄伝』から引用されており、お前を愛しているからこそ帰ってきたのだと言うアリストデモスに対して、出産を控えたセレーネが愛しているなら戦死者の妻たる名誉を与えて欲しいと頼み、男の子が生まれて弱い子だったらタユゲトス山に捨てるという科白がある⁽³³⁾。このように「スパルタの魂」には『英雄伝』を出展とする言葉が全てセレーネの科白に用いられているのである。

これは当時中国留学生に多大な思想的影響を与えていた梁啓超の「斯巴達小志」から示唆を受けたのではないかと思われる⁽³⁴⁾。「斯巴達小志」にはこれら三つの言葉は全て引用されている⁽³⁵⁾。「斯巴達小志」の第五節「スパルタの国民教育」をみてみよう。

スパルタの教育制度は、男子だけではなく、特に婦人にある。女子に対しては、家族の一部としてみなさず、国家の一部としてみなす。男子の婦人に対する尊重は、他の各国が及ばないところがある。婦人もまた自らを深く重んじ、自ら責任の所在を知っている。史によると、ある異国の貴婦人がスパルタ王レオニダスの後に言った。「ただスパルタの婦人のみが男子を支配することができる」と。後は答えて言った「ただスパルタの婦人のみが男子を産むことができる。」⁽³⁶⁾

魯迅は「スパルタの魂」を創作する以前からこの梁啓超の文章に眼を通していた可能性が高い。またその影響で、魯迅はかねてからギリシア史に関して関心を抱いており、当時目についた日本文献や梁啓超の「斯巴達小志」や留学生界の雑誌などを見ていたはずである。これらの資料もとに、魯迅は「スパルタの魂」の後半部分とセレーネの形象を作り上げたと考えられる。

文献	(一)	(二)	(三)
プルタルコス『英雄伝』	あり	あり	あり
梁啓超「斯巴達小志」	あり	あり	あり
魯迅「斯巴達之魂」	あり	あり	あり
『少年文武』	なし	なし	なし
『日本之少年』	なし	なし	なし
『尚武雑誌』	なし	あり	なし
『少年園』	あり	なし	なし
『婦人と子ども』	あり	なし	なし

- (一) 「スパルタの女子のみが男子を支配することができ、スパルタの女子のみが男子を産むことができたのである」
- (二) 「ねがわくは、汝、盾を持ちて帰り来たれ、しからずんば、汝、盾に乗りて帰り来たれ」
- (三) 男の子で弱い児ならばタユゲトス山に捨てるという話。

V 史実の書き換えと時代の影響

さきに少年雑誌の記事を敷衍するかたちでセレーネの形象が作られたことについて述べたが、もう一つ、史実を奇妙なかたちで変えている箇所が幾つか存在している。前半部分にエウリュトスが従卒の奴隷と共に戦場へと赴き討死するという逸話があるが、ヘロドトスの『歴史』には従卒の奴隷は戦役に加わらずに逃げたと記載されており、渋江『希臘波斯戦史』でも奴隷は逃げたことになっている。雑誌記事にもこの逸話は載っているが、奴隷については何も書かれていないものもある。しかし「スパルタの魂」においては、この部分で奴隷が主人に率先して前線に飛び込んだと書き変えているのである。ギリシアにおいて市民権がない奴隷に戦う義務はなく、従卒の奴隷が自ら戦役に積極的に加わるという事はギリシアでは非常に奇妙なことであり、逃げたとしても当然のことで非難されることもない⁽³⁷⁾。

また、「スパルタの魂」では眼病のために戦場から生還したアリストデモスが犯罪者として告発されることになっている。確かにスパルタの国法には死すべき戦線で生還した者に「恥辱を加えられる」のは道徳的なだけでなく、法的な制裁も含まれていたらしい。しかし、ヘロドトスの『歴史』においては犯罪者として告発されたのは、むしろ間道の存在を教えた裏切り者のエピアルテスであり、アリストデモスではない。その他に、小説の最後の場面では戦争へと少年達が赴くシーンがあるが、これも史実にはない。史実によると、スパルタの親衛隊は既婚で子供を持った者で結成されており、それは子孫を絶やさないための配慮であった。また、身重の妻、セレーネが自殺して夫を諫めるのもスパルタの状況からは考えにくい。子を産むことは女性の国家の一員として責務であり、将来の担い手である子供を宿した女性が自殺するはずがない。しかもそれが称揚されるというのはあり得ない⁽³⁸⁾。

このような一連の書き換えによって、「スパルタの魂」のテーマはスパルタ王レオニダスとその親衛隊を称えるというテーマから、弱者の勇気を強調して臆病者をより激しく非難することに重点が移ってしまっている。奴隷は主人よりも先に戦へと飛び込み、潔く戦

場で死なずに生還した者は犯罪者に仕立て上げられ、その妻は夫を非難して自殺をする。兵役へと向かう少年兵達はアリストデモスを非難する歌を歌う。最後に名誉を称えた墓碑を建てられるのも夫のアリストデモスではなく、妻のセレーネの方である。

このような魯迅による不自然な史実の書き換えは、弱腰で国を守ろうとしない中国の清朝政府とそれを激励する留学生との関係がアリストデモスとセレーネの形象に反映されているせいではないだろうか。当時、「義勇隊」事件とそれに連なる学生運動は、列強による中国侵攻への危機感とそれに対して取るべき毅然とした態度をとらない清国への焦燥感から起こったものであった⁽³⁹⁾。

反帝反封建を掲げた中国学生達の若く激しいナショナリズムは日本の日露戦争後のナショナリズムと呼応し、中国の近代国家建設への衝動と変化する。日本の日清戦争後に出版された日本青少年の愛国主義を高揚するために書かれた文章はこのような形に変えられて中国人留学生、魯迅の小説に痕跡を残しているのである。

VI 「スパルタの魂」の構成と文体

魯迅の「スパルタの魂」が少年雑誌に載せられた記事を敷衍してできたものであることは上で考察したが、果たしてこの作品を翻訳とみなすべきなのだろうか、それとも創作とみなすべきなのだろうか⁽⁴⁰⁾。

当時の明治初期の翻訳には「豪放訳」と呼ばれる翻訳方法もあり、現在の意識という範囲を大幅に超え、ほぼ改作に近い訳し方をしている。甚だしい時は人称まで変えてしまい、一人称「私」の視点で書かれている小説を三人称「彼」に変えて訳すことまでしている。このような背景を考慮すると、忠実に直訳していないからすぐに創作だと断言できない面があり、よりテキストに則した分析が必要と思われる。後半部分は明らかに創作と思われる要素が強いので、前半部に焦点を絞って考えてみよう。

「スパルタの魂」と少年雑誌の記事を比較すると、内容とテーマには共通性があるが、構成においては異なっている。例えば、『少年園』に掲載された記事は、ペルシア軍がギリシアに進軍しようとする説明から始まり、次にテルモピュライの地形に関する説明が続く。そして、ペルシア軍が「不死軍」という精鋭部隊をして戦わせ攻めあぐねている時に偵察を送って密偵させると、スパルタ人は優雅に髪を梳っていたというエピソードが載せられている。そして密偵がそれをペルシア王に伝え、ペルシア王はデマラトスによってこれがスパルタ人の死を覚悟している時に行われる儀式であることを知らされる。ペルシア王はこれを本気で受け取らず、スパルタ軍が退却するのを四日待って戦闘を開始する

が、攻めあぐねているところに間道の存在が告げられる。これらの記事は少年雑誌の「史伝」の欄に掲載され、基本的に事件発生の順序も時間通りに並べて記述され、記述方法も欧米の歴史文献に依っている。

これに対して、魯迅の「スパルタの魂」の導入部分は次のように始まる。

エーゲ海を染めた曙の色が、音もなくマリアス湾にしのび入り、イダ山の第一峰にかかる夜来の雲も、しだいに朝焼けの美しさを呈しはじめる。湾に沿う山々の間、テルモピュライの石塁の後方において、天下無敵、畏れることを知らぬギリシア軍は、レオニダス王麾下の七千のギリシア同盟軍を配備し、剣の鞘を払い、戈に枕して、東の空が白むのを待っていた。しかしながら、いづくんぞ知らん、数万のペルシア軍はすでに夜陰に乗じて間道を伝い、夜の引明けとともにイダ山の絶頂に到達していた。

昇りはじめた旭日の光線が、いましも閃光のごとくに石塁の一角に射す。（「斯巴達之魂」『浙江潮』第五期）。

この夜明けの光景の描写は、ちょうどレオニダス王がペルシア軍を迎え撃とうするまさにその朝に設定されている。次の描写「丘なすごとく堆く、冑に刻む『不死軍』なる三個のペルシャ文字こそ、昨日の敵軍の敗れし姿を語るもの」は昨日戦ったペルシアの「不死軍」が倒れている様子である。ペルシア軍は三百万の大軍で攻めてきており、ギリシア同盟軍は数的には圧倒的に不利である。ペルシアの精鋭部隊「不死軍」を倒したものの、そのぐらいでペルシア軍が攻撃を止めれるはずはない。しかし「レオニダスは夜を徹して防禦を堅め、敵の来襲を待つ。しかしながら、夜のとばりがすでに明けはなたれても、杳として敵は姿を見せぬ。」とあるように、なぜかその朝にはペルシア軍は全く姿を見せようとしない。そのためギリシア軍は「敵陣の鳥が朝日に向かって鳴き噪ぎ、全軍の将兵大いに危惧の念にかられていた。」。そして夜が明けた後に斥候がペルシア軍が既に間道を通ってギリシア軍の背後に回ったことをレオニダス王に告げるのである⁽⁴¹⁾。

と、案にたがわず、もはや防禦の術もない状況と見て取った斥候が、防ぐ手だてもありませぬ、と警報をもたらししたのであった。

テッサリア人のエピアルテスなる男が、イダ山の中峰に別の間道のあることを、敵に密告いたしました。それゆえ、万余の敵軍が夜陰に乗じて進撃、ポキス（ヒュシアイ）の守備兵を打ち破り、わが軍の背後を攻撃してまいります。

ああ、危ういかな、万事休す。警報に脳天を打ちのめされ、全軍は意気阻喪した。

退却を叫ぶ声は囂囂として砂塵を捲きあげるごとくに軍中に充満した。(「斯巴達之魂」『浙江潮』第五期)

ヘロドトスの『歴史』によると、レオニダス王は占師メグスティアスによって犠牲獣の臓腑の占いから死がもたらされることを予め告げられていた。更に投降者によってもペルシア軍の迂回作戦の情報が夜が明けぬ間にもたらされていたとあり、最後に夜の白む頃に山から降りてきた見張りの者からも情報がもたらされていたと記述されている⁽⁴²⁾。山の守備に当たっていたボキス人がペルシア軍の侵攻に気づいたのは、山が山檜に覆われており、その日は風のない穏やかな日にもかかわらず地面の木の葉がペルシア軍の足下で凄まじい音を立てたからである⁽⁴³⁾。ボキス兵は全滅覚悟でペルシア軍を迎え撃とうとするのであるが、ペルシア軍はボキス兵が山頂に逃げたのを見ると、そのまま山を下ってスパルタ軍の陣営へと急いだ。

同じ場面は『少年園』の「セルモピレーの大戦」において次のように書かれている。

翌日の戦争も亦同じく波斯人の全敗に決したれば、ザークセスは、とても此通路を攻め取ること叶わじと思ひけるに、折しもエフヒアルテスといふもの、利欲に迷ひて、エータ山を越ゆる間道あることを密告したりければ、ザークセスは、大に喜び、直ちに一大兵を送りて、此間道より希臘軍の後を衝かしめんとせり。時に黄昏の頃なりしが、翌日昧爽將に山頂に達せんとせし時、其処を守衛せるフォーシア人は、幾万の兵衆が、落葉を踏で進み来る数々の響を聞き、驚き起きて、兵器を取てこれを防がんとしたれども、其乱射する箭は、宛も驟雨の注ぐが如くなれば、今は叶はじと山頂に逃れたり。敵兵は、これを追はず、山の南端より下り始めたり。

其間にレオニダスは、敵兵中より逃れ来りしものに、此報を聞き、やがて又斥候の通知を得てければ、一たびは驚きしも、此山路たる崎嶇羊腸たるを以て、敵兵の山下に来る迄には、充分の間もあれば、敵の重圍に陥る前に、逃走すべき余裕あるより、兎も角もとて、レオニダスは、直ちに軍議を開きけるに、過半は最早防ぎ得られべくも見えねば、此所を打捨てて、希臘国将来の為め逃れ去るべしと主張せしかど、レオニダスは、之を聞かず。スパルタ人の義務として、レオニダスは、此処に勝つか、然らざれば戦死せざるべからずとて、独り此処に止まらんと云ひ、他の同盟軍には、速に退きて命を全ふすべしと勧めたり。(「セルモピレーの大戦」『少年園』第九二号、十四頁)

ペルシア王がテルモピュライを攻めあぐねているところに間道があるという密告がある、ペルシア軍はこの間道を通してスパルタ軍を攻め、この間道を見張っていたボキス人は防禦しようとしたが果たせずに山頂に逃れて、レオニダス王に告げるという順序で書かれている。

これと比較すると、「スパルタの魂」においては記事のように出来事が時系列で並べられていないのがわかる。物語の舞台はすべて決戦の一日に集約されており、その日以外に起こった出来事は背景化されている。例えば、ペルシアの「不死軍」との戦いの記述は省略されてしまい、昨日の激戦においてペルシア兵士の屍が折り重なって倒れている様子として描写されている。また事件の進行も現在進行形であり、登場人物の会話などが大いに取り入れられている。記事ではペルシア軍が間道を通して攻める報告が記述文で書かれているが、「スパルタの魂」では会話によって書かれている。このような書き方はただ単に「編訳」や「意識」というよりも、かなり魯迅が手を加えて構成しなおしたものである。

このように「スパルタの魂」は「史伝」を小説風にアレンジして作り上げられている。しかしそれにもかかわらず、魯迅は前言で自らを「訳者」と書いているのである。これは何を意味しているのだろうか。『浙江潮』発刊詞の「第二章：門類」「三學術」に「留学生は何ぞ事に学ぶなり。新學術を紹介するは我国過渡期時代に必ず負うところの責任なり。都べて其の類は凡そ八。」とあり、そのなかで「八小説」欄に「小説なる者は国民の影にして亦た其の母なり。その関係ある者を取りて或いは訳し或いは著するに務む。其の類は凡そ三。」として、「(甲) 章回体」「(乙) 伝記体」「(丙) 雑記体」の三つに分けている⁽⁴⁴⁾。この分類方法をみると、当時の中国留学生が「小説」として考えていた範囲が伝統的な意味での雑多な文章という意味とフィクションの訳語としての小説という意味の両方を兼ね合わせているように思える。この「スパルタの魂」を執筆した同時期の一九〇三年当時、魯迅は「月界旅行」、「地底旅行」を翻訳しており、「月界旅行・弁言」に「『月界旅行』の原書は、日本井上勤氏の訳本なり、凡そ二十八章、例は雑記の若し。」と書いている。魯迅はこれらの科学小説の翻訳の原著が「雑記」のような体裁を取っていると考え、それを「章回体」に倣った体裁に変えており、「説書人」を模倣した語り手が表面に顔を出すという叙述方法がとっていた。しかし「スパルタの魂」はこれと比較すると、旧小説を模倣しておらず、むしろ少年雑誌の「史伝」の欄に掲載された記事における語り口を模倣している。魯迅はこの作品を「伝記体」と意識していたはずであり、「語り方」を意識的に使い分け、「史伝」の語り方をしていたのである⁽⁴⁵⁾。

「史伝」という形式は、作者がギリシアの歴史物語を一種の寓話として用いながら自らの思想を語るのであり、作者がそのまま作品の語り手として登場する。激昂を帯びた語り

は当時明治における語り口調と通じているものであり、それは同時に中国留学生達、または中国知識人の語りにも影響を与えていた。魯迅自身、「特にあの「スパルタの魂」を今から読んでみると、自分でも耳たぶが熱くなってこずにはいられない。しかしそれは当時の風潮であって、激昂慷慨、頓挫抑揚してこそいい文章だと称されたのである⁽⁴⁶⁾」と述べている。魯迅がこのような語りを取ったのは、その意識において「史伝」の作者だったのであろう。そこで自らを小説の作者とみなさずに史伝の「訳者」と考えたと思われる。

おわりに

魯迅は友人の頼みに応じてこの「スパルタの魂」を即興で創作した。魯迅はこの作品を創作する際にギリシアの歴史書のみに基づいてテキストを構成したのではなく、明治日本におけるギリシア史の文献、少年雑誌記事、婦人雑誌までも参照とした形跡がみられる。これらの日本雑誌記事は欧米のギリシア歴史書の一部を切り取って脚色し、レオニダス王と王妃ゴルゴを称えて愛国主義の称揚を注入していた。そのため雑誌記事における尚武精神、セレーネの形象、そして激昂を帯びた語り口などがこの作品に痕跡を残している。

興味深いのは魯迅がそれを更に脚色していることである。これら日本の雑誌記事がギリシアの歴史を用いた単純な愛国精神の称揚であるのに対し、魯迅はそこに現実の拒俄事件という歴史事件を重ねている。三百万という圧倒的優勢を誇るペルシア軍に三百で立ち向かうレオニダス王とスパルタ軍、そこから逃げ帰った卑怯者のアリストデモス、そして夫を諫めて自害を果たす妻のセレーネ。レオニダス王の愛国主義を称えるという雑誌記事のテーマはアリストデモスの臆病を批判し、弱者の妻セレーネを称える主題へと変更されており、そこには弱腰で列強の侵略に耐えられない清朝政府と学生の関係が重ねられている。拒俄事件という時代背景のなかで日本から中国への思想の連鎖が起こり、魯迅のテキストの中には日本の文献における単純な愛国主義の称揚がかなり屈折したかたちで反映されているのである。

附

一 ギリシア軍の人数

少年雑誌記事において、ギリシア同盟軍の総勢は一律四千人となっており、その内訳は省略されている。しかし、魯迅はギリシア軍を総勢七千人としており、その内訳についても詳細に記している。

ヘロドトスの『歴史』では、スパルタ軍は三百人、ペロポネソス軍はテゲア、マンティネイアから千人、オルコメンスは百二十人、アルカディア各地は千人で合計二千百二十人。テスピアイ人は七百人、テバイ人は四百人、ポキス人は千人。計は約四千六百人。しかし、日本の歴史書ではこの分類方法を採用していない。ただ、洪江保著『希臘波斯戦史』だけがヘロドトスの「歴史」に準じた記述となっているが、注に「ペロポネソス軍三千人」、「ポキス人千人」、「テスピアイ七百人」、「ギリシア同盟軍は七千人」という数字を入れている。その他にセスピエ七百人、シーブス四百人、これにロクリスが加わるとしている。他のギリシア史は以下の通りである。

	「スパルタの魂」	『希臘波斯戦史』	『新編希臘歴史』	『稿本希臘史』
ギリシア総勢	7000	7000	7000	7000
スパルタ	300	300	300	300
スパルタの従者	1000	1000	1000	1000
ペロポネソス	3000	3000	3000	3000
テバイ	若干	400	400	400
ポキス	1000	1000	言及なし	1000
テスピアイ	700	700	700	700
ロクリス	600	言及なし	言及なし	言及なし

このように、魯迅は数字においてギリシア史を参照にしていることがわかる。しかし、ヘロドトスの『歴史』を含めてギリシアの歴史書ではロクリスの人数は言及していない。そこで魯迅自身が七千人から計算してロクリスの六百人を割り出した可能性がある。

二 ポキスの訳語

魯迅は「ポキス」を「佛雪」と「訪嘻斯」の二通りに訳している。ポキス人はペルシア軍が間道を通って攻撃するのを防ぐため防備に当らされた箇所にてでくる。ペルシア軍が攻めてくると、ポキス人は多勢に無勢、全滅の危機にさらされながら、山の上へ駆け上ってペルシア軍を迎え撃とうと構える。しかしペルシア軍はポキス人にかまわずにそのままテルモピュライへと向かってしまう。

有屠利利人曰愛飛得者。以衣馱山中峰有他間道告敵。故敵軍万余。乘夜進軍。敗
 佛雪守兵。而攻我軍背。

ここでは間道を守っていたポキス人は「佛雪」と訳されている。またペルシア軍が間道
 を通って進撃した際に撤退する軍中にはポキスも含まれている。

於是而胚羅蓬諸州軍三千退。而訪嘻斯軍一千退。而螺克烈軍六百退。未退者惟刹司
 駭人七百耳。

魯迅がどうしてこのような勘違いをしたのかは謎であるが、魯迅が少年雑誌記事とギリ
 シアの歴史書を同時に見たために生じたミスという可能性もある。少年雑誌のポキスの訳
 語とギリシア史を比べてみると、以下ようになる。

	ポキス
「スパルタの魂」	訪嘻斯、佛雪
『希臘波斯戦史』	フラーシス
『新編希臘歴史』	フォーキス
『稿本希臘史』	フォーキス
『少年文武』	フォキス
『日本之少年』	フォニシア
『尚武雑誌』	ホシア
『少年園』	フォーシア
『婦人と子ども』	魯迅は未見

「佛雪」が少年雑誌の「フォーシア」「フォニシア」などの「ア」で終わっているのに対
 応する訳語である可能性があり、「訪嘻斯」は「フォーキス」の「ス」に当たる訳語な
 のではないかと推測される。

表の出典一覧

梅溪樵夫「テルモピュレーの落城」『少年文武』第一年第十冊、一八九〇年

菜花園主人「聖れもびれい大戦争」『日本之少年』第三卷第一～四号、一八九一年

鯉淵樊「熱門の決戦（上）（中）」『尚武雑誌』第一・二号、一八九一年

不明「セルモピレーの大戦」『少年園』第九二号、一八九二年

米溪「大題小題二 サーマピレーの戦」『婦人と子ども』第三卷第六・七・十・十一号、

一九〇三年

桑原啓一編訳『新編希臘歴史』（経済雑誌社、一八九三年十月）

洪江保著『希臘波斯戦史』（『万国戦史』第二四編、博文館、一八九六年九月）

浮田和民著『稿本希臘史（歴史叢書）』（早稲田大学出版部、一九〇二年十月）

註

- (1) 鄭中秋「關於『斯巴達之魂』的主題」（『滄州師範專科學校学報』一九九一年一月）、吳作橋「魯迅的第一篇小説是『斯巴達之魂』」（『上海魯迅研究』第四期、一九九一年六月）、蔣荷貞「『斯巴達之魂』是魯迅創作的第一篇創作小説」（『魯迅研究月刊』一九九二年九月）、陳漱渝「『斯巴達之魂』與梁啓超」（『魯迅研究月刊』一九九三年十月）、樽本照雄「魯迅『斯巴達之魂』について」（『清末小説』第二二号、一九九九年二月）、中国語訳は「關於魯迅的『斯巴達之魂』」（『魯迅研究月刊』二〇〇一年六月）、吳作橋・周曉莉「晚清小説的奇株異葩——談魯迅的『斯巴達之魂』」（『清末小説から』第五五号、一九九九年十月）、吳作橋・周曉莉「再論『斯巴達之魂』是創作小説——與樽本照雄先生商榷」（『魯迅研究月刊』二〇〇三年六月）などが先行論文にあるが、魯迅のこの作品を取り上げた論考は「狂人日記」以降の作品に比べて多くない。
- (2) 前掲「魯迅『斯巴達之魂』について」
- (3) 三神禮次著、内藤耻叟校閲『日本武士道』（三神家満、一八九九年四月）
- (4) 山岡鐵舟口述、勝海舟評論、安部正人編纂『武士道』（光融館、一九〇二年一月）
- (5) 山室信一『日露戦争の世紀——連鎖視点から見る日本と世界』（岩波書店、二〇〇五年七月）
- (6) 桑兵『晚清学堂学生與社会変遷』（稻禾出版社、一九九一年十一月）八四～八五頁
- (7) 中村哲夫「拒俄義勇隊・軍国民教育会」（『東洋学報』第五四卷第一号、一九七一年六月）、上垣外憲一『日本留学と革命運動』（東京大学出版会、一九八二年八月）参照。
- (8) 魯迅の「スパルタの魂」は『浙江潮』第五期と第九期に分けて掲載された。第九期は「長夜未央」から始まる。内容的にはセレーネの登場前と登場後に断絶があるが、第九期に掲載された部分は既にセレーネの登場後の場面である。尚、本稿での「スパルタの魂」の引用の訳は、一九八五年に学習研究社から出版された『魯迅全集』第九巻を参照とした。またその訳では「斯巴達武士」を「スパルタの戦士」としているが、本稿ではそのまま「スパルタの武士」と訳した。
- (9) 許寿裳「四『浙江潮』撰文」（『亡友魯迅印象記』人民文学出版社、一九五三年六月）
- (10) ヘロドトス『歴史』は松平千秋訳で岩波文庫に収録されている『歴史（下）』（岩波書店、一九七二年二月）を参照とした。
- (11) この「アタナトイ」は英訳では“immortals”であり、日本文献が「不死隊」、「不死隊軍」、「不死軍」などと訳しているのはこの英語によったものであろうと思われる。
- (12) 前掲「魯迅『斯巴達之魂』について」参照。
- (13) ペエトル・パアリー著、西村恒方訳『万国歴史直訳』（紀伊國屋源兵衛、一八七二年）などを初めとし、明治初期には多くのパリーの『万国史』の翻訳が出版された。
- (14) 岡本監輔著『万国史記』第五冊（内外兵事新聞局、一八七九年五月）、天野為之著『萬國歴史』（富山房、一八八七年九月）等。

- (15) 永井久一郎訳「希臘史篇」(文部省編『文部省百科全書』第十三卷、青史社、一九八三年四月～一九八六年五月、所収)
- (16) 「希臘史、羅馬史」(ウィルヘルム・チャンブル、ロベルト・チャンブル編、文部省摘訳『百科全書』第八・九卷、丸善、一八八四年、所収)
- (17) 宮川鉄次郎著「希臘羅馬史」(『万国歴史全書』博文館、一八九〇年三月)
- (18) 息究爾(セウエール)著、楯岡良知等訳『希臘史略』(文部省、一八七二年)、スウエル著、松尾久太郎訳『希臘史直訳』(岩藤錠太郎他、一八八八年十二月)
- (19) 桑原啓一編訳『新編希臘歴史』(経済雑誌社、一八九三年十月)
- (20) 渋谷保著『希臘波斯戦史』(『万国戦史』第二四編、博文館、一八九六年九月)
- (21) 「早稲田専門学校史学科講義録」(『史学雑誌』第一五二号、一九〇二年)
- (22) 坂本健一訳「ヘロドトス(早稲田大学卅七年度歴史地理第二学年講義録)」(早稲田大学出版部、一九〇五年)、坂本健一訳「ヘロドトス(早稲田大学卅七年度史学科第二学年講義録)」(早稲田大学出版部、一九〇六年)
- (23) 坂本健一譯『ヘロドトス』(隆文館、一九一四年二月)
- (24) 浮田和民述『西洋上古史(東京専門学校文学科第三回第一部講義録)』(出版社不明、一八九七年?)
- (25) 浮田和民著『稿本希臘史(歴史叢書)』(早稲田大学出版部、一九〇二年十月)
- (26) 浮田和民述『西洋上古史(早稲田大学卅八年度政治経済科第一学年講義録)』(早稲田大学出版部、一九〇五年)、浮田和民述『西洋上古史(早稲田大学卅九年度歴史地理科第一学年講義録)』(早稲田大学出版部、一九〇七年)
- (27) 新見吉治訳『プルタルコス偉人伝:第一輯(早稲田大学卅六年度史学科第二学年講義録)』(早稲田大学出版部、一九〇五年)。同名の新見吉治訳『プルタルコス偉人伝(東京専門学校講義録)』第三(四?)巻(東京専門学校出版部、一九〇二年)を焼きなおしたものとされる。
- (28) 「序章」続橋達雄『児童文学の誕生——明治の幼少年雑誌を中心に』(桜楓社、一九七二年十月)を参照。
- (29) 『少年園』は一八九五年四月、日清講和条約が成立した直後に政府から発行停止命令を受け、廃刊となった。ある記事の一つが権力者の逆鱗に触れたためである。他の『幼年雑誌』、『少年世界』等の雑誌は戦況報道の機能をもたせ、日清戦争をより精彩に伝えようと試みている。『少年世界』には「征清画談」という欄があったが、日清終戦後にはそれが「尚武」の欄となっている。(前掲『児童文学の誕生——明治の幼少年雑誌を中心に』一九三頁)
- (30) 「第九節 女子教育論」(前掲『児童文学の誕生——明治の幼少年雑誌を中心に』)参照。
- (31) 前掲「大題小題二 サーモピレーの戦」『婦人と子ども』第三卷第十一号、一九〇三年
- (32) 明治期の雑誌『弘道叢記』第五九号に「スパルタのレオニダス王国に殉ず」という記事が掲載されており、その記事は「文武叢記」から転載されたものであると注記されている。ただ、この記事は未完のまま終わっている。このような記事が明治の雑誌記事に掲載されていた可能性はある。また、アリストデモスが重い眼病を患って静養していた土地は「アルペノイ」であるが、この地名は渋谷保著『希臘波斯戦史』以外には出てこない。魯迅がこの本を多少なりとも参照としたのではないかと思われる。
- (33) この言葉は当時非常に有名であり、魯迅および在日留学生が好んで口にする言葉であった。中島長文「『哀塵』一篇は魯迅の訳する所に非ざるを論じ兼ねて『造人術』に及ぶ」(『颯風』

第三九号、二〇〇五年）参照。ただ、この論考においては、「造人術」は魯迅が翻訳したのではないのではないかという仮説が提出されている。

- (34) この梁啓超の「斯巴達小志」はプルタルコスの「英雄伝」に出てくる逸話を主にひいており、第五節で国民の教育は男子だけではなく、女子にも必要であることを述べる。しかし、この中に引用されている逸話には固有名詞は全く引用されていないのに対して、魯迅の場合は固有名詞がでてくる。例えば、「官によってその体格を検査され、合格しない者は山の中に捨てられた」とあるが、これは妻のセレーネの科白に「弱い児ならばタユゲトス山の谷に捨てましょう」とあり、ここではきちんと「タユゲトス」という固有名詞を使っている。そこで、魯迅はこの梁啓超の文章をみた可能性は充分にあるが、他の文献も参考としたはずである。ただ、この時点でまだ日本語の完全な『英雄伝』訳は出版されていない。魯迅が何を参照としたのかは今の時点ではわかっていない。
- (35) 前掲「『斯巴達之魂』與梁啓超」も、魯迅の「スパルタの魂」と梁啓超のこの文章との関係に言及している。
- (36) 梁啓超「斯巴達小志」（『梁啓超全集』第三卷、一九九九年七月、所収）
- (37) セレーネの他に魯迅が創作した人物としてケルトスという人物がいる。この人物について、前掲「魯迅『斯巴達之魂』について」は「第一に不可解なのは、ケルトスという男をなぜ魯迅が設定したのかという疑問だ。単なる狂言回しのつもりなのか。ケルトスは、人妻に恋慕して窓の外から内をうかがい、アリストデモスに賞金を懸けるように仕向け、アリストデモスの死体を捜し出し、ことの顛末を公表してセレーネの記念碑を建立する切っ掛けを作る。」と述べている。なぜ魯迅がこの人物を作り出したかは疑問であるが、それは最後の場面で、アリストデモスの墓を建てるかどうかという問題が議論された際に、夫を諫めたセレーネの存在をこの男が話すことになっているので、そのために設定した人物と考えることが妥当と思われる。
- (38) 前掲「魯迅『斯巴達之魂』について」でもこの問題について言及している。
- (39) 「一方、清朝政府は列強の圧迫に対して卑屈に媚び諂い続けており、学生達は専制制度に対し怒りに満ち、そこで彼等は政府に対して常に警戒心を持っており、統治者に救亡の希望を抱いていなかった。学生達の愛国の叫び声と行動のなかには、清政府と離反する傾向が到る所に現れている。二十世紀初、国内の学生は民族危機にひどく敏感であり、時には焦りの感情ももっていた。その原因は清政府が全く外国の侮蔑に抵抗できず、逆にその専制と腐敗が中国の落伍軟弱を作り出して、列強との抗争できなるとははっきりと認識していたからである。清政府は自らの私的な利益のために、往々にして民族の權益を惜しまずに犠牲にした。そこで学生達は政府が立ち上がって闘争を指導することを期待しておらず、その干渉を努めて排除しようとし、自らが愛国の重任を背負おうと考えた。この点について、支配階級の一部の人にも察しているものがいた。湖南巡撫の趙爾巽は学生に言った。「彼らは忠君愛国の根本を知っているのに、なぜ我々の学生は何かあると上の二字を棄てて、愛国のみ言うのだ。反政府、排満の議論さえないのだ？」（前掲『晚清学堂学生與社会変遷』九十頁）
- (40) 前掲「魯迅的第一篇小説是『斯巴達之魂』」、前掲「『斯巴達之魂』是魯迅創作的第一篇創作小説」、前掲「魯迅『斯巴達之魂』について」、前掲「再論『斯巴達之魂』是創作小説——與樽本照雄先生商榷」等がこの問題に関して考察を加えている。これらの論評は「スパルタの魂」を歴史小説の一種としてみなす。ヘロドトス『歴史』をもとにしていたとし

でも魯迅が潤色を加えたなら創作小説であると述べている。しかし、その根拠として魯迅自身の証言等を挙げているが、あまりにも主観的に論が展開されていると筆者は感じる。樽本氏は「魯迅『斯巴達之魂』について」、前半部分に描かれたテルモピュライの役に関する部分と生還したアリストダモスを妻のセレーネが責める場面とに分かれていると指摘し、前半部分は編訳で、後半部分は創作であるとみなしている。

- (41) この部分は『歴史』には書かれていない叙述であり、むしろ少年雑誌に掲載された記事を参照としたと思われる部分である。本論中に引用した「聖れもびれい大戦争」（『日本之少年』第三卷第二号、二四頁）においても同様に間諜がペルシア軍の動きをレオニダス王に告げると書かれている。
- (42) 前掲『歴史』第七卷、一三九頁、二一九頁
- (43) 前掲『歴史』第七卷、一三九頁、二一八頁
- (44) 『浙江潮』第一期
- (45) 『地底旅行』の第一回、第二回は『浙江潮』第十期に掲載され、一九〇六年に南京の啓新書局から出版された。『月界旅行』は進化社から一九〇三年十月に出版された。
- (46) 「集外集・序言」（『魯迅全集』第七卷、人民文学出版社、一九八一年）